

「日々の理科」(第 4422 号) 2026, -9, 18

「秋の北極圏旅行記(4)」

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所

田中 千尋 Chihiro Tanaka

20回以上もスカンジナビア半島北部を訪問しながら、なぜまた行くのか?理由は明確です。一つ目は、現地の友人たちと再会すること。二つ目は、初めて訪れる同行の友人と感動を共有すること、三つ目は、多くの読者の方に、旅の感動を届けることです。私は現在3つのメールマガジンを毎日発信していて、合計で数千人の読者の方がいます。その方々にも、旅先で感じた多くの感動をお届けしたいのです。



しかし、今回の旅行は更に四つ目の目的があります。それは「秋の北極圏」を自分の目で見ることです。今までの訪問で一番多かったのは冬(12月~1月)、次が春(3月~4月)、そして夏(7月~8月)です。秋は初めてなのです。果たして8月とは劇的にちがう景観でした。



カリックス川を渡りました。秋の景観の中を実に

滔々と流れる、美しい川です。



道は国際幹線道路「E10号線」に入り、ひたすら北を目指します。再び北極圏の境界線を示すモニュメントを通過しました。



やがて、北極圏の街「イエリバーレ」に入ります。鉱山(鉄鉱石)、鉄道の要衝です。かつては観光でも賑わいましたが、今はかなり衰退しているそうです。



スウェーデンに限らず、海外の街では、交差点に信号機がなく、ロータリーになっていることが多いです

ね。スウェーデン北部も大きな交差点はほぼロータリーで、信号は一か所ありません。慣れるとそれほどこわくないです。



国際幹線 E10 号線から、スウェーデン国道 45 号線に乗り換えます。右上に見えるのは、イエリバーレをご案内のシンボル「ドゥンドレット山」です。



イエリバーレから 40 分ほどで、宿泊地のポルユスに着きました。懐かしい「ポルユス駅舎」が見えた時は、やはり嬉しかったです。



宿泊するバンドレハム（コテージ）は、線路を挟んで湖の目の前にあります。この線路はインランズバーナン（内陸鉄道）の線路です。6 月～8 月には一日一往復の観光列車が停車しますが、今の時期は臨時列車や貨物列車、それに保線車両が来るだけです。



宿舎の窓からは、広大な湖（ストーラ・ルーレ・ヴァッテン）が広がっています。街明かりも遠く、遮るものも何もないので、部屋の中からオーロラを観望できるのです。



この宿舎は何もかもセルフサービスなので、「ウェルカム・ドリンク」也没有。そのかわり、ダルマ（線路の転轍機）の上に、「ウェルカム・バード」が出迎えてくれました。これは「ヨーロッパハクセキレイ」*Motacilla alba* です。スウェーデン名は Sädessärla（セーデスエルラ）といいます。喉から胸にかけての黒い「よだれかけ」が最大の特徴です。9 月になると越冬地へ向けて南東方向への渡りを始め、北東アフリカ～中東方面で越冬します。北極圏の短い夏を終え、まさに南へ旅立とうとしているハクセキレイなのでしょう。